

林春美『《蕉風》与非左翼的馬華文学』

(台湾:時報文化、2021)

及川 茜

文芸誌『蕉風』は、1955年の創刊から1999年まで488期に及ぶ歴史を有し、「純文芸」を謳い、馬華文学(マレーシア中国語文学)の重要な舞台となった。友聯文化機構の傘下に属し、シンガポールで創刊され、数年後にクアラルンプールに拠点を移している。1999年に一度停刊したものの、2002年に南方学院大学馬華文学館が引き継ぎ、第489期から刊行を継続し、2021年5月の最新号までに514期を数えている。

著者の林春美(Lim Choon Bee)はマレーシア・ペナン出身で、シンガポール国立大学で博士号を取得し、現在はプトラ大学中国文学専攻准教授を務める。馬華文学館に移管後の『蕉風』編集の任にも当たった時期があり、編者として散文や小説のアンソロジーも手がけるなど、同時代的に馬華文学の生産にも携わっている。散文作家として著書もあり、作者と編集者、そして読者という複数の立場から文学空間に参加している。それはすなわち、著者自身が研究と出版活動の両面から、今まさに馬華文学史の構築の一翼を担っているということを示す。本書において『蕉風』を「マレーシア建国前後の異なる歴史的段階を閲してきた純文学の刊行物として、文学的資産であり、馬華文学史のエッセンスの資料庫である」(15頁)と位置付けるのは、その意味において、現在に直結するものと捉え連続性を見出す姿勢の表れでもあるだろう。

本書に収録された論考は「緒言」を入れて9編で、1編を除き2010年からのほぼ10年間に発表された。『蕉風』の創刊から1970年代までをカバーし、対象とする年代に沿って排列されている。『蕉風』はそもそも香港の友聯文化機構を母体として刊行された文芸誌であり、研究史においては冷戦構造とモダニズムの2つの面から多く論じられてきたと指摘される。友聯は米国広報文化交流局と密接なつながりを有し

ていたことが明らかにされているが、著者はそれを踏まえた上で、緒言の中で、冷戦構造や米国の支援による文化的影響が「文学生産の唯一可能な、あるいは最も合理的な説明なのだろうか」(23頁)との疑問を提起している。友聯の刊行による『蕉風』の終点から振り返るなら、モダニズムが必然的に「非左翼馬華文学」の唯一の到達点となるわけではない。採算上の困難を抱えながら発行が継続されてきたこの「非左翼馬華文学」雑誌には、本質的には素朴な文学の非功利性が貫かれていたというのがその指摘である。

馬華文学の担い手とマラヤ/マレーシアとの関連を論じた部分を中心に見てゆこう。本書では方天(Fang Tian)と白垚(Bai Yao)という、共に『蕉風』主編を務めながら後に北米に移住した作家が取り上げられる。この2人について、近年編まれた選集のうち、1939年を起点に創作の言語を問わずマレーシア華人作家の作品を集めた『回到馬來亞』(マラヤへの帰還)[張・黄・莊 2008]、2013年から2016年の馬華小説を集めた『野芒果 馬華当代小説選 2013-2016』(野生のマンゴー)[林・高 2019]を試みに見ると、前者には方天の小説「爛泥河的嗚咽」(泥の河の嗚咽、1956)が、後者には白垚の自伝的小説『繡雲前書』からの抜粋「書生意気」(書生の気概、2016)が収録されている。馬華作家という身分は必ずしもマレーシア国籍とは結びつけられないが、80年代までマレーシアに暮らした白垚はともかく、方天に至ってはわずか数年のマラヤ在住経験が記録されるのみである。彼の足跡は、いかなる意味で馬華文学史に位置付けられるのだろうか。

馬華作家であり研究者である黄錦樹(Ng Kim Chew)はかつて、「馬華文学的国籍」という一文を物し[黄 2015]、華人民族主義とマレー民族主義、そしてマ

レーシア・ナショナリズムのいずれの角度からも、馬華文学が国家の枠組みでは受け入れられず無国籍状態であることを示した。林春美は本書の中で、創刊当時の『蕉風』が「純マラヤ化」を謳っていたことを示す。当時のマラヤ化とは、単一の民族文化に融合することではなく、「各民族文化を融合させた新たな文化」(39頁)であるべきだと考えられていた。その理想が実現していれば、国籍を得た馬華文学の未来を描くことは可能だっただろう。しかし、現実には、1956年の方天の小説「一個大問題」(ある重大な問題)に描かれるように、華人にとっては文学以前に自身の公民権取得すらたやすく解決できる問題ではなかった。とりわけ、マラヤにやって来て日の浅い「新客」作家たちにとって、その現実が平面的な背景ではあり得ず、民族問題から目を逸らすことは不可能だった。著者は彼らの焦慮と、その理想が現実の前についえる姿を『蕉風』誌面から再現してゆく。

創刊当初の編集を担った方天について論じた「想像方天, 以及他的時代」(想像の方天および彼の時代)は、2000年初出の短論である。方天は上海の大学を卒業した後、1953年から54年まで香港で友聯の刊行物の一つである『中国学生周報』の編集を務め、55年にシンガポールに渡るも、57年頃香港に戻り、58年にはカナダに渡った。『蕉風』編集を務めた時期には諸説あり、本書では慎重を期して期間を狭く取り、創刊号から18期までを方天の編集と仮定している。彼がマラヤを去ることになった経緯は不詳だが、独立前夜の『蕉風』には、主体的にマラヤの文化建設に携わろうと作者や読者に呼びかける文言も見え、マラヤの民間伝説や風習、マレー文学の翻訳などを積極的に紹介するその編集態度から、当時は彼もマラヤに根をおろすつもりであったことが推測される。

「非左翼の本邦——《蕉風》及其「馬來亞化」主張」(非左翼の本邦——『蕉風』およびその「マラヤ化」の主張)では、1950年代の『蕉風』に掲載された文章を例に論じられる。冷戦を背景に『蕉風』の母体である友聯が米国の資金提供を受けていたことを踏まえれば、マラヤを「永久に住み続ける郷里」とするという編集部の「マラヤ化」の主張は、共産主義に傾斜せず「自由世界」を守ることを可能にするものでもあった。ただし、1957年のマラヤ独立憲法発布の前後には、公民権や言語、マレー人の特別な地位をめぐる激し

い議論が闘わされており、『蕉風』誌面にもその現実を反映した小説が掲載される。しかしこうした問題は、1969年の5月13日事件以降は、センシティブな問題として長期にわたり馬華文学の禁忌であり続けた。続く論考「独立前の《蕉風》与馬來亞之國族想像」(独立前の『蕉風』とネーションとしてのマラヤの想像)では、創刊からマラヤ独立までの期間に範囲を絞り、同時期の世論を背景に、編集側の主張とその理念の実践、掲載されたテキストから、編者と作者たちが新たに生まれようとしているネーションをどのように想像し呼びかけていたかが検討される。当時の『蕉風』編集部は、香港からやって来た友聯メンバーである南来文人(方天・申青)と、マラヤの文化教育界で十年近く活動した経験を持つ人々から構成されていた。『蕉風』が謳った「純マラヤ化文芸」の旗印は、マラヤ社会の民族的・文化的多元性の認知と、それを理解しようという渴望の上に築かれており、創刊から半年間はほぼどの号にも翻訳文学も含めマラヤを知るための様々な文章が掲載されている。そこには多民族社会としてのマラヤへの帰属意識が窺える反面、創作の面では、自らの民族的帰属が主流を成すマレー社会に受け入れられないことへの焦慮の念が反映されている。この2つの論考の結論部分には、「未完」(未竟)との語が反復される。「マラヤ化の主張は、政治的に正確であったにもかかわらず、『蕉風』の創刊から現在に至るまで、未完の志業であり続けている」(68頁)、また「マラヤ(およびそのやや後のマレーシア)のネーション構築は、国家が独立を獲得してから半世紀以上を闊した今、なお未完の政治的課題である」(88頁)という文言からは、一度は描かれたマラヤの可能性を現在地から振り返り、そのあるべき延長線上に未来を構想する視線を読み取るべきだろう。

白垚を論じた文章は2編収録されている。「馬華現代主義文学的起始」(馬華モダニズム文学の起点)においては、いわゆる「第一波モダニズム」の旗手としての白垚と、彼の主張した「新詩の再革命」の意味が説き明かされる。「身世の杜撰与建構——白垚再南洋」(経歴の創作と構築——白垚の再南洋)では、米国移住後、晩年に執筆したマラヤ/マレーシア時代を回顧する大量の文章について、「再南洋」という視点から論じ、それが馬華作家としての文学的な「入籍」であると結論づけられる。白垚(1934-2015)は広東

省生まれで、1949年に香港に亡命し、台湾大学歴史学部を卒業した後、シンガポールに渡って友聯に参加したが、1980年代には米国に移住している。1960年代中期にマレーシアで執筆した「漢麗宝」(ハン・リーポー)と「中国寡婦山」(キナバル山)は、それぞれ『スジャラ・ムラユ』と民間伝説に基づく語り物『龍舟三十六拍』を元にした戯曲である。いずれも中国への航海の場面から始まり、中国の公主ハン・リーポーもドゥソンの姫の二娃も死によって夫への貞節を示す。中国古典文学では男女の関係が君主と臣民の関係に重ねて示されることが多いが、白焄はさらにこの伝統的な君臣関係を国家と国民の関係に読み替えた。著者はこれを「落地生根」のこの上ない説明として読み解いている。だが現実には、白焄はマラヤの地に根をおろすことはなく米国に移住した。回想録を含む作品集『繡雲起於綠草』(2007)、自伝体の長編小説『繡雲前書』(2016)という大部の書籍は、いずれも晩年に米国で著され、マレーシアで刊行されたものである。彼の遺骨の一部は、遺族の手でハン・リーポーの旅路の終着点であるマラッカの海に散骨されたという。彼は「我々」「マレーシア華人」の集団の来歴を創作したが、それ以上にマレーシア華人としての自身を構築することに尽力した。この晩年の執筆こそが長くたゆまぬ帰郷の旅路であった。こうした白焄の「再南洋」の営為の前には、国籍によって文学的属性を切り分けることは粗雑で暴力的でさえあると指摘される。

そのほかには「黄崖与一九六〇年代馬華新文学体制之建立」(黄崖と一九六〇年代馬華新文学体制の創立)、「張寒与梁園——一九六〇年代《蕉風》「現代派」的兩個面向」(張寒と梁園——一九六〇年代『蕉風』「モダニズム派」の二つの側面)、「蕉風吹到大山脚——一九七〇年代小説敘事」(蕉風が山のふもと(ブキッ・ムルタジャム)へと吹いてきた)の4編の論考が収録される。馬華モダニズムの角度から『蕉風』を経年順に分析した3編に加え、2018年の「大山脚文学国際学術研討会」で発表されたブキッ・ムルタジャムの作家群像を描く異色の論考が掉尾を飾る。

最後に、台湾の出版界における本書の位置付けにも触れておこう。馬華文学研究はマレーシアのほか、台湾にも拠点が築かれている。本書は台湾の時報文化出版社から「浮羅人文」シリーズの一冊として刊行

された。「浮羅」はマレー語のpulauをはじめ、マレー・ポリネシア語族の「島嶼」を指す語彙の音訳である。島々をつなぐ海域アジアの視点から、様々な人文書を出版するもので、最新のラインナップにはミャンマーの女性作家ヌヌイー(インワ)(Nu Nu Yi, Inwa)によるトランスジェンダーの霊媒を描いた小説集の翻訳が見える。また、学術書のシリーズでは聯経出版から「South書房」として、東南アジアを扱った海外の書籍が翻訳刊行されている。こうした出版事業の背景には台湾と東南アジア各地の間での人の移動と、それに伴う日常生活から経済、政治、また学術的範囲に及ぶ東南アジアへの関心の高まりがあることは想像に難くない。また、上記のいずれのシリーズもマレーシア出身の研究者や出版人が企画に関わっており、台湾の出版界とマレーシアとの結びつきを示す例としても注目されるであろう。本書はその結節点にあり、国籍の枠を超えた馬華文学研究者のネットワークを可視化したものでもある。

参考文献

- 黄錦樹(2015)「馬華文学的国籍」『華文小文学的馬来西亜個案』、台北:麦田出版。
- 張錦忠・黄錦樹・莊華興編(2008)『回到馬来亜』、雪蘭莪:大将出版社。
- 林春美・高嘉謙編(2019)『野芒果——馬華当代小説選2013-2016』、吉隆坡:三三出版社。